

THEATER
COMMONS
TOKYO

浮世
三日月

THEATER COMMONS TOKYO

シアターコモンズ'21

Tsai Ming-Liang

Yuko Nakamura

Meiro Koizumi

Susanne Kennedy & Markus Selg
in collaboration
with Rodrik Biersteker

Akira Takayama/Port B

Bady Dalloul

Aya Momose

Tomoko Sato

開催概要

都市にあらたな「コモンズ（共有地）」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。第5回目となる今回は、「Bodies in Incubation 孵化／潜伏するからだ」をテーマに、リアル空間と仮想空間の両方で、VR／ARを活用したパフォーマンスや映像作品、体験型アート、ワークショップ、言論イベントなどを1ヶ月にわたり集中的に展開します！

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なものと複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

第5回目となる今回は、リアル空間とバーチャル空間の両方で、パフォーマンス、体験型アート、ワークショップ、言論イベントなどを1ヶ月にわたり集中的に展開します。

シアターコモンズは、港区内に拠点をもつ国際文化機関、台湾文化センター、ゲーテ・インスティトゥート東京、アンスティチュ・フランセ日本、オランダ王国大使館とNPO法人芸術公社が実行委員会を形成し、「港区文化プログラム連携事業」として港区内を中心に展開します。



ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. This fifth edition of Theater Commons Tokyo will be presented under the theme “Bodies in Incubation.” Over the course of one month, we will mount a packed program of VR/AR performances, video works, experiential art, workshops, talk events, and more!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

For this fifth edition, we will mount a month-long packed program of VR/AR performances, video works, experiential art, workshops, talk events, and more.

Theater Commons Tokyo is held in venues across Minato ward as part of FY2020 Minato Cooperation Project for Cultural Program. The executive committee is composed of Arts Commons Tokyo and the following international cultural institutions based in the ward: Taiwan Cultural Center (Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan), Goethe-Institut Tokyo, Institut français du Japon, and Embassy of the Kingdom of the Netherlands.



Bodies in Incubation 孵化／潜伏するからだ

いま、世界中の「からだ」が、孵化／潜伏の時間を過ごしている。

2020年から2021年にかけて、私たちは移動と接触と集会を制限された、特異な時間を生きている。移動すること、他者と触れあうこと、集まること。人間という生物にとって必要不可欠な営みが、厳しい制限・管理下に置かれて既に1年が経過する中、個々人の心身や感覚にもさまざまな変調が生じているはずだ。

もちろん私もその一人だ。テレワークが常態化した非常事態宣言下、デジタル・デバイスの画面が「いま・ここ」の主戦場になった時、私は自分の遠近感や時間感覚が著しく失調するのを感じた。時間が前に進んでいる感覚が失われ、自分の「からだ」がそこに存在するという現実感が希薄になっていく。パソコンを起動すれば、二次元的に現れる他者と正面から対面するのに、目を合わせることはできない。手を伸ばしても触れることはない。ともに呼吸をすることもない。情報交換はできても、情動の交換はできない。近くものが遠くに、遠くものが近くになって、遠近感が混乱してしまう。

Teleという接頭辞は「遠隔」を意味するが、これまで人類は望遠鏡、テレフォン、テレビジョンなど「テレ」の技術を発明することで、「ここ」と「よそ」、「わたし」と「あなた」の距離を縮めてきたと言える。だがコロナ禍では、あらゆる営みの「テレ化」が急激に加速した結果、現実を構成する距離感や時間感覚が乱調してしまったのだ。「テレ」の技術をもってしても会いたい人に会えない、行きたい場所に行けない隔離の中で、私はいつの間にか、いまこそ必要なのはテレポーテーション（瞬間移動）とテレパシーではないか、という妄想に取り憑かれた。

そんな隔離生活を経て私の中に着床したのが、Incubationという言葉だ。インキュベーションというと日本ではビジネス用語のニュアンスが強いが、原義では

「孵化」と「潜伏」を同時に意味している。卵が孵化する状態とウイルスが増殖する状態が一つの言葉に併存しているとはなんとも示唆的ではないか。確かに私たちはいま、卵とウイルスを同時に抱えたまま、「待機の時間」を生きている。生命の誕生とその危機は一つの身体にパラレルに存在し、それゆえ、私たちの存在を揺さぶる。その両義的な生命のありようは、まさに芸術のそれとも重なる。創造と破壊、進化と淘汰といった相反するものの境界性がゆらぎ、組み換わり、同時に存在するリミナルな時間を私たちは生きているのだ。

この「待機の時間」の裂け目から、今回のシアター・モンズのキュレーション・コンセプトは練られている。

病の時代、治癒と再生

誰しも心身の不和や失調を抱えながら歩まざるを得ないコロナ時代。誰もが無自覚のまま感染当事者になり得る事態は、「健康であることが善」という近代的価値観にも強い揺さぶりをかけている。私たちは知らず知らずのうちに他者を感染させる加害者にもなり得るし、その逆もあり得る。こうした恐怖は人々を過度な管理や差別へと駆り立てる一方、体温や体調など個人の身体にまつわる情報がいとも無批判に権力の管理下に置かれていく。そもそも病や生死は生物の存在にとって根源的なもののはずだが、いま、全世界を覆う恐怖は、逆説的に病や死を私たちから遠ざけ、接触できないガラスの向こうに追いやっている。

このように疫病蔓延が人間の身体にまつわる普遍的な問題を再び顕在化させる時、芸術はどのような応答が可能なのか。芸術には、医療とは異なる方法でトラウマや痛みを語り直すことで治癒する力があるとしたら、それはいま、どのような形で実装され得るのだろうか。

ツァイ・ミンリャンのVR映画では、主人公の男性は謎

の病に冒されて養生にいそしんでいる。どんな治療も効果があがらない中で、森の中の廃墟に住みつく他の生命との触れあいが彼を治癒へと導いていく。中村佑子のAR体験型映画『サスペンデッド』は、病の親をもつ子供の視点から捉えた世界を体現する試みだ。中村自身が当事者として経験したという「生」の宙吊りの感覚を追体験することで、私たちは言葉にできない痛みや感覚をいかに癒やし合えることができるだろうか。百瀬文は今回初めて、治療とアート体験が一体化したセラピーパフォーマンスという新領域を切り拓く。観客は実際に鍼治療を受けながら、百瀬の手掛ける声の介入によって、自らの身体の中に起こる劇的変容と治癒を同時に体験することになる。接触することが忌避される時代に、敢えて触覚的なアプローチをとるこれらの作品を通じて、芸術と治癒、再生をめぐる思考を開いていきたい。

集まらない時代の集まり方：アート・テレポーテーション

コロナは「集まり」を禁じる。シアター（劇場／演劇）やモンズ（共有地）はいまや、感染リスクの高い場として世界中で厳しい制限下に置かれている。であれば、この制限の中でも可能な新たな「集まり」の形を発明し、再設定することが急務であろう。そもそも演劇は、仮想と現実を重ね合わせることで成立する芸術であり、舞台は、常にどこか「よそ」を仮想的に出現させる装置でもある。テレポーテーションして会いに行きたい。テレパシーで情動を交換したい。もう会うことができない人、遠くの人、「いま・ここ」を共有できない人やものとの遭遇や対話を、演劇的な想像力は可能としてきたはずだ。

こうした考えのもと今回シアター・モンズでは、現実空間だけでなく仮想空間の中でも対話と集会が可能な方法の開拓を目指し、3つの新作を製作し世界に先駆け

て発表する。ポストヒューマン演劇の先駆的存在である演出家スザンネ・ケネディは、観客一人ひとりが仮想空間の中で体験する対話型VR作品を創作する。観客が仮想空間で出会うのは、人工知能AI だろうか、それとも自分自身（I AM）か。小泉明郎は前作『縛られたプロメテウス』に続いて、VR技術を活用したパフォーマンス『解放されたプロメテウス』を新たに制作する。観客が仮想空間で体験するのは、誰か他者の見た夢の風景だ。その夢が現実と重なり合った時、私たちはどんな解放と戦慄を体験することになるだろうか。前述した中村佑子の新作映像では、AR(拡張現実)技術を映画鑑賞の形態に応用することで、観客はその物語が起こったであろう現実の空間で二重化された世界を体験する。またツァイ・ミンリャンのVR映画では、観客が完全に映画の空間の中に没入し、自らもその世界に浮遊する存在となる。

今回のシアター・モンズでは、これらVR/AR技術を応用した4作品を「アート・テレポーテーション・プラットフォーム事業」として特集することで、仮想空間と現実空間の両方で展開される表現の可能性を探索する。仮想と現実の結託と拮抗から生まれるこれらの作品を通じて、これまで身体的、経済的、政治的などさまざまな理由で公共空間に集まることができなかった人たち、ものたちにも開かれた、新たな「集まり」の形を模索したい。

二つの災厄の「あいだ」で耳を澄ます

震災から10年、パンデミックから1年。いま、私たちは二つの災厄の「あいだ」の時間を同時に生きている。1000年に一度の天変地異、100年に一度の疫病流行と言われる、動物的に把握できない長さの時間。非常事態を日常として生きる有事の時間。10年間緊急事態宣言下にある被曝地域で止まったままの時間。オリン

Bodies in Incubation

Chiaki Soma

Today, bodies across the globe are experiencing a period of incubation.

From 2020 into 2021, we've lived through a peculiar time of limited mobility, contact, and gathering. As a year passes with our essential human activities placed under strict scrutiny and control, individuals are clearly witnessing a slew of abnormalities in their mental, physical, and sensory experiences.

Of course, I am no exception. The state of emergency declaration normalized telecommuting; when the digital device's screen became the battleground of the "here and now," I felt both my perspective and perception of time rapidly distort. We lose sight of time moving forward, and our sense of reality – that our physical body exists in a real location – wanes. If we turn on our computers, we can share face-to-face meetings with people in two dimensions, but we cannot make eye contact. When we reach out, we cannot touch or breathe the same air. We can exchange information, but not affect. Things near us feel far away and those at a distance feel close, and our sense of perspective becomes skewed.

The prefix "tele" in telecommuting means "to or at a distance." One could say that humans invented various "tele" technologies – be it the telescope, the telephone, or television – to close the gap between here and there, me and you. But the pandemic fast-forwarded the "telefication" of all activities. As a result, we've lost control of our senses of distance and time, out of which reality is composed. Quarantined, unable to see people or go anywhere by choice, even with the "tele" technology, I found myself haunted by a fantasy: perhaps now, more than ever, teleportation and telepathy are what we need.

Through these months of quarantine, the word "incubation" grew on me. Although it has business connotations in Japan, the word originally denotes both hatching and latency. How indicative is it that an egg's hatching and a virus's reproduction coexist within a single word? Indeed,

we now live within a "wait time," cradling both egg and virus. The birth of life and its attendant risks exist in parallel within one body, and this, in turn, affects our existences. This equivocal condition of life precisely overlaps with that of art. We live in a liminal time where the boundaries between oppositions – creativity and destruction, evolution and selection – waver, recombine, and simultaneously persist.

I conceived of TCT'21's curatorial concept through the fissures of this wait time.

The Age of Disease, Healing, and Rebirth

The coronavirus era forces everyone to live with some form of mental imbalance or physical ailment. Today's situation, where anyone can be an asymptomatic carrier, profoundly destabilizes our modern understanding of good health as a virtue. We can easily inflict harm as unwitting perpetrators or vice versa. On the one hand, explicit fears provoke people to extreme levels of discipline and discrimination. On the other, authorities begin to monitor biometrics, such as our temperatures or physical conditions, unquestioned. Disease, life, and death should be fundamental to the existence of living beings. Yet the fear that permeates today's world paradoxically keeps illness and death away, pushing them behind the glass screen where we cannot make contact.

When, once again, the spread of a pandemic exposes universal issues of the human body, in what ways can art respond? If, unlike medicine, art's power to heal lies in re-telling stories of trauma and pain, how might it be applied today?

In Tsai Ming-Liang's virtual reality (VR) film, the male protagonist recuperates from a mysterious disease. When no other treatment proves useful, contact with beings in the ruins of a forest leads him to heal. Yuko Nakamura's interactive augmented reality (AR) film *Suspended* attempts

ピックに向けた時計に強制同期させられた時間。隔離生活の中で単調に繰り返される個の時間。私たちは、勝手に暴走する複数の時間に混乱し、疲労し、失調している。今回のシアターコモンズは、この失調した時間や狂った遠近法をもう一度調整し、現在進行形の災厄の「あいだ」で揺れる自他の声に耳を澄ます場としても構想されている。

今回、高山明は9年前に上演したツアーパフォーマンス『光のない。エピローグ?』を大胆にリクリエーションして再演する。舞台は、東京電力本社をはじめ日本の高度経済成長とともに発展してきたビジネス街・新橋一帯だ。10年前に福島の子供たちによって読み上げられたイェリネクの言葉たちは、コロナ禍で宙吊りの東京に、どのように響くのだろうか。バディ・ダルルは自らのルーツである中東・シリアを覆い続ける不条理な災厄に対し、架空国家を作るという遊戯の手つきによって揺さぶりをかけるワークショップを開催する。佐藤朋子は、オリンピックに向けた再開で風景が激変する都心・港区エリアに対峙し、過剰なまでに上書きされ、消去される都市の記憶の襞に触れていく。1957年に岡本太郎が書いた都市論「オバケ東京」を起点に今後数年間かけて続けられるリサーチの成果は、レクチャーパフォーマンスという形で出力され、移ろいゆく都市の諸層を掘り上げていくことになるだろう。これらの作品を通じて、共同体が共有する大きな災厄や出来事のあいだに流れる複数の時間を行き来し、そこでかき消された声や記憶を再編成することで、狂った時間と距離感をチューニングできるのではないだろうか。

これら3つのキュレーションの核は、相互に干渉し合い、作品と観客、仮想と現実、歴史と未来、言葉と実践の「あいだ」を行き来しながら交わり、深められていくことになるだろう。これらは、先の見えない不安定な時代を生きる私たちの生存を賭けた問いでもある。確かにウイ

ルスも放射能も不可視で制御不能な驚異だが、そもそもそうした制御不能なものの存在を人間中心主義と技術信仰によって見えなくしていたのは人間の奢りでもある。歴史を振り返れば、人類はどれだけの天変地異や疫病流行を経験してきたことだろう。自然の制御不能な力に触れ、それを畏怖してきたことだろう。そしてその度に、芸術や宗教は、個や共同体のトラウマを語り直すことで治癒し、日常と秩序を回復してきたはずだ。

いま、「待機の時間」の中で宙吊りにされた私たちの生と「からだ」をもって、コロナ後の世界を知覚していくこと。そこには、人間以外のもの、他の生命や存在、ウイルスさえも含んだ調和があるはずだ。そのための新たな環境とエコロジーを作り出すのが、これからのシアター（演劇／劇場）とそのコモンズ（共有地）の新たな役割ともなるだろう。その進化形を産み出すために、私たちはいま、潜伏し、孵化を待つ。

今回のシアターコモンズは、その「待機の時間」を生きる私たちが、それぞれ可能な形態で集まり、思考と情動を共有・交換し、癒やし合うための、しなやかな「触れあい」の場となることを期待している。ぜひそれぞれの身体を伴って、あるいは遠隔で、あらゆる場所からご参加いただけたら幸いである。

相馬千秋（シアターコモンズ ディレクター）

プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| NPO法人芸術公社 代表理事／アートプロデューサー。「フェスティバル／トーキョー」初代プログラム・ディレクター（F/T09春～F/T13）、文化庁文化審議会文化政策部会委員（2012-15）等。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年より「シアターコモンズ」実行委員長兼ディレクター。「あいちトリエンナーレ2019」のキュレーター（舞台芸術）も務めた。

to embody a world seen through the eyes of a child with ill parents. As we trace Nakamura's first-hand experience of "life" in limbo, how can we heal each other's indescribable sensations and pain? Aya Momose breaks new ground with a first-time therapy performance that merges art with treatment. Audience members receive real acupuncture and, with the intervention of voices controlled by the artist, they simultaneously sense dramatic changes in their own bodies. Through these daring works that take a tactile approach at a time when physical contact should be avoided, we hope to initiate ideas around art, healing, and rebirth.

Art Teleportation: How to Gather in an Age of Social Distancing

Coronavirus forbids us from gathering. Theater(s) and the commons now face strict restrictions as high-risk sites. We must then invent and reconfigure new forms of gathering that are possible under these circumstances. Theater is already an art form that relies on the layering of virtuality and reality. The stage also serves as a mechanism that continuously and virtually presents an "elsewhere." Wanting to teleport to see someone; yearning to exchange affect through telepathy. The imagination of theater has undoubtedly enabled us to encounter and engage in dialogue with people who have passed, people who live far away – people or things with whom we can't share the "here and now."

Guided by these ideas, TCT'21 presents the global premieres of three newly commissioned works as we aim to develop ways to gather and converse in real and virtual spaces. Susanne Kennedy, a leading director of post-human theater, creates an interactive VR piece that allows us to individually experience the virtual realm. Will we encounter artificial intelligence or our own selves ("I AM")? As a follow up to his

previous work *Prometheus Bound*, Meiro Koizumi utilizes VR technology to create *Prometheus Unbound*. The audience experiences the landscape of someone else's dream in virtual space. When that dream overlaps with reality, what sense of release or horror might we share? In Yuko Nakamura's aforementioned new film, she applies AR technology to the viewing, inviting the audience to experience a dual world of real space where the narrative appears to have taken place. In Tsai Ming-Liang's VR film, the viewer is completely immersed in the film's world, becoming a floating presence within.

For TCT'21, we feature these four works that apply VR/AR technology as our Art Teleportation Platform Initiative to explore the possibilities of expression that develop in both real and virtual space. Through these works, created from the collusion and rivalry between the virtual and the real, we seek new forms of gathering open to people and things previously denied access to public space due to physical, economic, and political reasons.

Listening Between Two Crises

A decade since the earthquake, and a year since the pandemic's onset, we now live in the interstices of two disasters. Cataclysms are said to occur once every 1,000 years, and pandemics once every 100 – lengths of time that cannot be innately grasped. Crisis time becomes our everyday life. Suspended time permeates irradiated areas where, over a decade ago, an emergency was declared. Forced time syncs with the Olympics' ticking clock. Monotonous time loops for those in quarantine. These multiple axes of time rampage as they please, leaving us confused, exhausted, and broken. We have designed TCT'21 as a site to readjust our warped senses of time and perspective, and to listen to our own and others' voices vacillate between the

ongoing disasters.

This year, Akira Takayama boldly revives his tour performance from nine years ago, *Kein Licht - Epilog?* The piece takes place in the Shinbashi area, a business district that boomed alongside TEPCO and other markers of Japan's rapid economic growth. How will Elfriede Jelinek's words, read aloud by high school girls from Fukushima a decade ago, resonate with Tokyo in its pandemic-limbo state? Bady Dalloul hosts a stirring workshop that offers the playful gesture of creating fictional countries in response to the many absurd catastrophes that pervade Syria, where his family originates. Tomoko Sato tackles the central Minato ward area, whose landscape undergoes manic redevelopment for the Olympics. There, she sheds light on the city's wall of memories – excessively overwritten and erased. Using Taro Okamoto's 1957 urban treatise *Ghost Tokyo* as a base, she presents her research findings in a lecture-performance. Through an ongoing project scheduled to continue for the next few years, she salvages the city's fleeting layers. These works should help us travel back-and-forth between the multiple axes of time that pass amid catastrophes and events shared by communities. Rearranging lost voices and memories via performance, we might retune our distorted senses of time and distance.

These three curatorial concepts interfere and intersect with one another at their core, digging deeper as they move across and between artwork and audience, virtuality and reality, history and future, language and practice. They also serve as questions, with our survival during an unforeseeable and unpredictable era at stake. It's certain that both virulence and radioactivity constitute invisible and uncontrollable wonders. Yet it was our anthropocentrism, our technology worship that obscured the existence of these unruly phenomena from the beginning – that is, it was our human self-indulgence. Looking back at history, humanity has experienced countless

cataclysmic natural disasters and pandemics. It has felt and stood in awe of the ungovernable powers of nature in innumerable ways. Each time, through re-telling experiences of individual and collective trauma, art and religion have helped us heal and recover our senses of order in daily life.

Now with our lives and bodies thrown into limbo, into wait time, we must begin to realize our post-corona world. There we should find a vision of harmony that includes non-human beings and existences, even viruses. Future theater(s) and their commons will be tasked with creating a new, appropriate environment and ecology. To birth these evolved forms, we await, as bodies in incubation, for our time to hatch.

Our hope is that TCT'21 provides a space for fluid contact, where we may gather within our own capacities to exchange thoughts and feelings as we live through the wait time. We look forward to seeing you join from any location, in body or online.

Profile

Chiaki Soma | Representative Director of NPO Arts Commons Tokyo, Art producer. Chiaki was the first Program Director of Festival/Tokyo, Japan's leading performing arts festival, from 2009-2013, as well as the first Director of Steep Slope Studio in Yokohama from 2006-2010. She served on the Agency for Cultural Affairs' Culture Council Cultural Policy Subcommittee from 2012-2015. In 2015, she received the Chevalier de L'Ordre des Arts et des Lettres. Since 2016, she has been a Specially Appointed Associate Professor, College of Contemporary Psychology, Body Expression and Cinematic Arts, Graduate School of Contemporary Psychology of Rikkyo University, Tokyo; since 2017, she has served as the chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its director. She is also involved in theatrical curation for the 2019 edition of the Aichi Triennale.

シアターコモンズ '21

Theater Commons Tokyo '21

page

02	開催概要
04	キュレーション・コンセプト
10	目次
11	プログラム
37	会場
38	スケジュール
40	クレジット

page

03	About
07	Curatorial Concept
10	Contents
11	Program
37	Venues
38	Schedule
40	Credit



©HTC VIVE ORIGINALS, photo by Chang Jhong-Yuan

ツアイ・ミンリャン [台湾]

Tsai Ming-Liang [Taiwan]

—

らん にゃ じ 蘭若寺の住人 The Deserted

日時

2月11日 [木・祝]–2月21日 [日]

11:00/13:00/15:00/17:00/19:00

休演 | 2月15日 [月]、2月16日 [火]

上演時間

約50分 *入れ替え制

会場

ANB Tokyo 6F

〒106-0032 港区六本木5-2-4

参加方法

要予約・コモンズパス提示

定員 | 各回16名

上演言語

台詞なし

Dates

February 11th [Thu]-21st [Sun]

11:00/13:00/15:00/17:00/19:00

Days off | February 15th [Mon], 16th [Tue]

Performance times

approx. 50 min. *Tickets are valid for one performance only.

Venue

6F ANB Tokyo

5-2-4 Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032

How to Participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.

– Number of places: 16

Language

No dialogue

台湾を代表する巨匠映画監督ツアイ・ミンリャンによる、初のVR映画。 圧倒的な映像美に没入し、その世界を浮遊せよ。

Float through a world of immersive, astounding beauty in Taiwan-based auteur Tsai Ming-Liang's first virtual reality (VR) film.

名実ともに台湾を代表する巨匠映画監督ツアイ・ミンリャン。近年では映画のみならず美術や舞台にも表現を拡張し、日本でも多くのファンを魅了し続けている。そのツアイ監督が初めて手がけたVR映画『蘭若寺の住人』は、ヴェネチア国際映画祭のVR部門で発表され絶賛された話題作だ。台湾の大手メーカーHTCが開発したVRシステムVive Proを駆使し、観客は360度の視野から映画の中に入り込み、リアルで強烈な体験をすることになる。

舞台は森の中の廃墟。リー・カンション演じる主人公は、謎の病におかされ、無気力にその治療にいそんでいる。食事を受け付けず、風呂の中で飼っている一匹の魚にしか心を開くことができない彼の周りに、時々現れる女たち。映画は終始無言のまま、この奇妙な家や、森の中に息づく生命、霊、自然の気配を映し出していく。そしてある嵐の瞬間を境に、物語は突然動き出す…。

観客はこの映像詩を五感で受け止め、没入し、やがて自分自身さえも物語の中に浮遊する霊的存在となるような体感を得ることになるはずだ。

クレジット

出演 | リー・カンション、チェン・シアンチー、イン・シン、ルー・イーチン
監督 | ツアイ・ミンリャン 脚本 | ツアイ・ミンリャン、クロード・ワン
エグゼクティブ・プロデューサー | シェール・ワン、リウ・スーミン プロデューサー | クロード・ワン
共同プロデューサー | クリスティン・チャン
撮影監督 | ソン・ウェンチョン 技術統括 | ジャック・ホアン 照明 | イアン・クー
美術 | カオ・ジュンホン、リー・ティエンチュエ、ツアイ・ミンリャン 衣装 | ワン・チアフイ
音響 | デニス・ツァオ 録音 | リー・ユーチー、リー・ボーヤオ
プロダクションマネージャー | ヤー・イエ ポストプロダクションコーディネーター | トミー・チャン
編集 | ジャック・ホアン 国際マーケティング | リン・ファンシュウ、シャオ・ペイウエン、マオ・リーツウ
提供 | HTC VIVE 協力 | JAUNT CHINA STUDIO 製作総指揮 | リウ・スーミン、ジェイムス・フォン
製作 | HOMEGREEN FILMS
共同製作 | HTC VIVE ORIGINALS, JAUNT CHINA STUDIO, G.C. ENTERTAINMENT
助成 | BUREAU OF AUDIOVISUAL AND MUSIC INDUSTRY DEVELOPMENT, MOC
海外販売 | HTC VIVE ORIGINALS

東京上映
翻訳協力 | 樋口裕子 会場協力 | ANB Tokyo (一般財団法人東京アートアクセレーション)
特別協力 | HTC NIPPON株式会社 機材協賛 | 株式会社サードウェーブ
助成 | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター



プロフィール

ツアイ・ミンリャン (蔡明亮) | 1957年、マレーシア生まれ。77年に台湾に移住。92年、『青春神話』で映画監督デビュー。『愛情萬歳』(94)でヴェネチア国際映画祭金獅子賞を、『河』(97)でベルリン国際映画祭銀熊賞 (審査員グランプリ) を受賞し、世界的に注目を集める。近年はアートインスタレーションにも進出。托鉢僧に扮したり・カンションが、群衆の中を超スローモーションで歩く様子を撮影する“行者 (Walker)”プロジェクトを2012年から開始。現在までに、8作の短編を仕上げていく。10作目の長編作『郊遊 <ピクニック>』(13)でヴェネチア国際映画祭審査員大賞を受賞。商業映画からの引退を表明するも、18年に『あなたの顔』を製作。そして20年には、11作目となる長編劇映画『日子』(英題: Days)を発表し、ベルリン国際映画祭コンペティション部門に選出された。

Having earned his well-deserved reputation as Taiwan's leading master of cinema, Tsai Ming-Liang has in recent years expanded his work in film and ventured into theater and art as he continues to captivate fans across the world, Japan included. *The Deserted*, his first VR venture, premiered in the Venice Film Festival's VR section to critical acclaim. The work uses Vive Pro, a VR system developed by Taiwan's pioneering tech company HTC. Viewers take part in the film with a 360-degree perspective, which creates a visceral, powerful experience.

Set in a ruined house in a forest, the film's protagonist, played by Lee Kang-sheng, sluggishly recuperates from a mysterious illness. He is unable to eat anything, and while women occasionally appear before him, the only being he can confide in is the fish he keeps in his bathtub. Without dialogue from beginning to end, the film portrays the surreal house and traces of the people, spirits, and natural phenomena that inhabit the woods. A storm arrives and from there, the narrative takes a sudden turn. As viewers are immersed in the cinematic poem, taking it in with all five of their senses, they may soon feel like one of the ghostly figures floating through the story.

Credit

Cast | Lee Kang-Sheng, Chen Shiang-Chyi, Yin Shin, Lu Yi-Ching
Director | Tsai Ming-Liang Screenwriter | Tsai Ming-Liang, Claude Wang
Executive Producers | Cher Wang, Liu Szu-Ming Producer | Claude Wang
Co-Producer | Christine Chiang Director of Photography | Sung Wen-Chung
Technical Coordinator | Jack Huang Gaffer | Ian Ku
Production Designers | Kao Jun-Honn, Lee Tien-Chueh, Tsai Ming-Liang
Costume Designer | Wang Chia-Hui Sound Designer | Dennis Tsao
Recordists | Lee Yu-Chih, Lee Po-Yao Production Manager | Yaya Yeh
Post-Production Coordinator | Tommy Chang Editor | Jack Huang
International Marketing | Lin Fang-Hsu, Hsiao Pei-Wen, Mao Lee-Tzu
Presented by HTC VIVE In association with JAUNT CHINA STUDIO
Produced by Liu Szu-Ming, James Fong Production | HOMEGREEN FILMS
Co-Production | HTC VIVE ORIGINALS, JAUNT CHINA STUDIO, G.C. ENTERTAINMENT
With the support of BUREAU OF AUDIOVISUAL AND MUSIC INDUSTRY DEVELOPMENT, MOC
International Sales | HTC VIVE ORIGINALS

Screening in Tokyo
Translation Support | Yuko Higuchi Venue Support | ANB Tokyo (Tokyo Art Acceleration [TAA])
Equipment Support | HTC NIPPON Corp., THIRDWAVE Corporation
With the support of Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan



Profile

Tsai Ming-Liang | Born in Malaysia in 1957, Tsai Ming-Liang is one of the most prominent film directors of the new cinema movement in Taiwan. In 1994, his film “Vive L’amour” was awarded the Golden Lion award at the Venice Film Festival, and this helped establish a place for him in the world of international film. In 2009, “Face” became the first film to be included in the collection of the Louvre Museum’s “Le Louvre s’offre aux cineastes.” It has since become the benchmark for films venturing into the world of art galleries. In recent years, Tsai Ming-Liang has also moved on to installation art. His works have been well-received in Venice, Shanghai, Nagoya. Since 2012, he has been working on a long project to film Lee Kang-Sheng’s slow walk, cooperating with various cities and organizations. To date, he has completed eight short works. His 10th full-length feature “Stray Dogs” (2013) was awarded the Grand Jury Prize at the 70th Venice Film Festival. In 2014, he presented the critically acclaimed theater work “The Monk from Tang Dynasty” in arts festivals in Brussels, Vienna, Gwangju and Taipei. That same year, Tsai made history by bringing his movie “Stray Dogs” at the Museum at MoNTUE, the Museum of National Taipei University of Education.



©HTC VIVE ORIGINALS,
photo by Chang Jhong-Yuan



“Suspended” by Yuko Nakamura

中村 佑子 Yuko Nakamura

サスペンデッド Suspended

日時

2月11日 [木・祝]–2月28日 [日]

平日 | 15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00
土日祝 | 11:00/11:30/12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/
15:30/16:00/16:30/17:00
休演 | 2月15日 [月]、2月22日 [月]

上演時間

約30分 *入れ替え制

会場

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示

*お客様がお一人様ずつ体験いただく作品です。
*ご予約の時間帯に来ていただいた順に、お一人様ずつご案内いたします。
リモート参加 | 予約後送付されるURLよりアクセスしてください

上演言語

リアル参加 | 日本語
リモート参加 | 日本語 (英語字幕つき)

AR体験型映画

リモート参加有

Interactive AR Film

Online participation

Dates

February 11th [Thu]-28th [Sun]

Weekdays | 15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00
Weekends and holidays | 11:00/11:30/12:00/12:30/13:00/13:30/
14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00
Days off | February 15th [Mon], 22nd [Mon]

Performance times

approx. 30 min. *Tickets are valid for one performance only.

Venue

Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to Participate

In-person participation | Booking essential. Show general admission pass on entry.
- This work is meant to be experienced one person at a time.
- Participants will be guided at the time of their reservation on a first come, first served basis.
Online participation | Please access the event via the link sent upon your reservation.

Language

In-person participation | Japanese
Online participation | Japanese (with English subtitles)

病んだ親を持つ子どもの視点から経験する、宙吊りの「生」の感覚。 誰もが病と隣接する時代に寄り添う、AR映画体験。

Live “life” in limbo from the perspective of a child with ill parents – Yuko Nakamura presents an AR film experience that makes space for an era where everyone lives in proximity to disease.

映画監督・作家の中村佑子。『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』をはじめ、繊細な揺らぎを触覚的に掴み取る独自の映像世界で高い評価を得てきた。一方、文芸誌『すばる』(集英社)での長期連載を経て出版された単著『マザリング 現代の母なる場所』では、同時代の女性たちへのインタビュー、過去の女性たちが綴った文学・哲学テキストの引用を縦糸に、自身の少女時代や母親との関係や記憶を横糸に、「母なる場所」をめぐる壮大な哲学的エッセイを編み上げ、新たな女性文学の最前線を切り拓いている。

今回、シアターコモンズからの委嘱を受け、「病の親を持つ子どもたち」をテーマとした初のAR映像作品の創作に取り組む。中村は「病気の親がいると、家のなかに病や死の予兆がある。その予兆のなかで世界を感じると、高い解像度をもって世界の像が子どもに迫ってくる」と語る。観客は、かつてある家族が住んでいたであろう家を一人ひとり訪ね、ある子どもの視点から二重化された世界を体験する。

誰しも心身の不安を抱えながら歩まざるを得ないコロナ時代。死が隣接した宙吊りの「生」の感覚に触れることで、言葉にできない痛みや感覚をいかに癒し合うことができるだろうか。

クレジット

監督・脚本 | 中村佑子
出演 | 宮下今日子、ソニア、宗雲凜音
撮影 | 佐々木靖之
撮影助手 | 上野陸生
音響 | 黄 永昌
照明 | 後閑健太
美術 | 出井奈保
衣装 | 臼井梨恵
ヘアメイク | くどうあき
助監督 | 佐藤 駿
VR制作 | 株式会社A440
協力 | 加藤枝里、夏苺郁子、久永隆一
会場協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京
製作 | シアターコモンズ、株式会社A440

プロフィール

中村佑子 (なかもら・ゆうこ) | 1977年、東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科卒。哲学書房にて編集者を経て、テレビマンユニオン参加。美術や建築、哲学を題材としながら、現実世界のもう一枚深い皮層に潜るようなナラティブのドキュメンタリーを多く手がける。映画作品に『はじまりの記憶 杉本博司』、『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』(HOTDOCS正式招待作品)、テレビ演出作にWOWOW「はじまりの記憶 現代美術作家 杉本博司」(国際エミー賞・アート部門ファイナルノミニー)、NHK「幻の東京計画 首都にありえた3つの夢」(ギャラクシー奨励賞受賞)、NHK「建築は知っている ランドマークから見た戦後70年」などがある。シアターコモンズ'19ではスーザン・ソントグの『アリス・イン・ベッド』のリーディングを演出。文芸誌『すばる』での長期連載を経て、2020年12月に初の単著『マザリング 現代の母なる場所』を出版。

Filmmaker and artist Yuko Nakamura has earned high praise for her unique visual lexicon that tangibly captures subtle movements, seen in works such as *A Room of Her Own: Rei Naito and Light*. She has also compiled her long-running essay series for literary magazine *Subaru* (Shueisha) and published *Mothering: Our Voice, Our Care in Modern Society*. The book features interviews with women of her generation and literary and philosophical quotes from women in history, interwoven with Nakamura’s memories of her childhood and relationship with her mother. Producing a grand, philosophical series of essays in search of moments where mothering takes place, she breaks new ground in women’s literature.

Commissioned by Theater Commons Tokyo, Nakamura produces her first AR film, focusing on children with ill parents. “When you live with parents who are sick, omens of illness and death appear in the house. As the child experiences the world through these signs, its images approach them in high-resolution,” she explains. One-by-one, viewers visit a house that appears formerly inhabited by a family, experiencing a duplicated world from a child’s perspective.

In the age of coronavirus, we are all forced to live in a state of physical and mental anxiety. How much of our indescribable pain and sensations can we heal by experiencing “life” in limbo, nearing death?

Credit

Direction and Screenplay | Yuko Nakamura
Cast | Kyoko Miyashita, Sonia, Rion Sogumo
Director of Photography | Yasuyuki Sasaki
Assistant Director of Photography | Rikuo Ueno
Sound Designer | Koh Yu Chang
Gaffer | Kenta Gokan
Production Designer | Nao Idei
Costume Designer | Rie Usui
Hair and Make-up | Aki Kudo
Assistant Director | Shun Sato
VR Production | A440 Inc.
Cooperation | Eri Kato, Ikuko Natsukari, Ryuichi Hisanaga
Venue Support | Goethe-Institut Tokyo
Production | Theater Commons Tokyo, A440 Inc.

Profile

Yuko Nakamura | Yuko Nakamura was born in Tokyo in 1977 and graduated from Keio University’s Faculty of Letters as a Philosophy major. Following her work as an editor at a philosophy publisher, she joined TV MAN UNION. She is involved in the creation of many narrative documentaries that dive past the surface of the modern world, treating topics such as art and architecture, philosophy and more. Her films include “Memories of Origin: Hiroshi Sugimoto”; “A Room of Her Own: Rei Naito and Light” (official selection at 2017 Canadian International Documentary Festival Hot Docs 2017); TV documentary WOWOW “Memories of Origin: Contemporary Artist Hiroshi Sugimoto” (finalist for International Emmy Award for Arts Programming 2012); NHK “Illusory Tokyo Project: Three Potential Dreams of the Capital” (winner of Galaxy Honors for programs recommended 2015); NHK “Architecture Knows: Postwar 1970 as Seen From Landmarks,” and more.
In Theater Commons Tokyo ’19, she directed the reading performance of Susan Sontag’s “Alice in Bed.” Her long-running essay series, “Mothering: Our Voice, Our Care in Modern Society” in literary magazine Subaru, has finally been published as a single author for the first time in Dec, 2020.





© Meiro Koizumi

小泉明郎 Meiro Koizumi

解放されたプロメテウス Prometheus Unbound

日時

2月17日 [水]

15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30

2月18日 [木]–2月21日 [日]

11:00/11:30/12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30

16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30

上演時間

約30分

会場

SHIBAURA HOUSE 5F

〒108-0023 港区芝浦3-15-4

Dates

February 17th [Wed]

15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30

February 18th [Thu] -21st [Sun]

11:00/11:30/12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30

16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30

Performance times

approx. 30 min.

Venue

5F SHIBAURA HOUSE

3-5-14 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

VRパフォーマンス

リモート参加有

VR Performance

Online participation

リアル空間と仮想空間で生成される「解放の夢」。 人類の逆説を突きつける、体験型パフォーマンス。

Meiro Koizumi's interactive performance confronts the audience with humanity's paradoxes through a “dream unbound” generated in virtual and physical space.

国家、共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係性を、現実と虚構を織り交ぜた実験的映像やパフォーマンスで探究するアーティスト、小泉明郎。あいちトリエンナーレ2019で初演されたVR演劇作品『縛られたプロメテウス』は、仮想と現実、陶酔と覚醒、肉体の超越と限界など、観客を両極に引き裂く体験を創出し、高い評価を得た。

本作は、前作の続編とも言える新たなVR作品。約2500年前に書かれたアイスキュロスの戯曲『縛られたプロメテウス』に続く『解放されたプロメテウス』は現存せず、いかにプロメテウスがゼウスと和解し解放されたか、私たちはその結末を知ることはいくつか。小泉はその失われた戯曲をコロナ禍の現代に接続し、仮想空間とリアル空間の双方において、複数の観客が参加できる儀礼的パフォーマンスとして再構築する。生と非生命の境界線上でリチュアルな体験を共有する人々は、その場で生成される「解放の夢」に、どう加担し、どう距離をとるのだろうか。

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示

定員 | 各回6名

リモート参加 | 予約後送付されるURLよりアクセスしてください

上演言語

リアル参加 | 日本語

リモート参加 | 日本語 (予定)

クレジット

構成・演出 | 小泉明郎

出演 | グイン・ホンクアン、グエン・フォン・アン、チャン・マン・トゥオン、ミン・グエン、レティ・レ・トゥイ

VR制作 | 株式会社A440

協力 | ディン・テ・チュン、ブイ・ティ・ドン

製作 | シアターコモンズ、株式会社A440

プロフィール

小泉明郎 (こいずみ・めいろう) | 1976年群馬県生まれ。国家・共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係について、現実と虚構を織り交ぜた実験的映像やパフォーマンスで探究している。これまでテート・モダンのBMWテート・ライブや上海ビエンナーレ、シャルジャビエンナーレ等、多数の国際展等に参加。個展としては「Projects 99: Meiro Koizumi」(ニューヨーク近代美術館、2013)、「捕われた声は静寂の夢を見る」(アーツ前橋、2015)「帝国は今日も歌う」(Vacant、2017)、「Battlelands」(ペレス美術館、マイアミ、アメリカ合衆国、2018)等を開催。VR技術を使った作品では『サクリファイス』(MMCAソウル、韓国、2018)、『縛られたプロメテウス』(あいちトリエンナーレ2019)がある。シアターコモンズではワークショップを経て『私たちは未来の死者を弔う』(2018)を製作・発表した。

Meiro Koizumi is an artist who blends reality and fiction in experimental videos and performances that explore the relationships between the state, the collective, and the individual, as well as the human body and its emotions. *Prometheus Bound*, his highly-acclaimed virtual reality (VR) theater piece that premiered at Aichi Triennale 2019, created an experience that tore the audience between polarities: virtuality and reality, intoxication and awareness, transcendence and the limitations of physical bodies.

With this new VR piece, Koizumi presents something of a sequel to his previous work. No copy of Aeschylus' *Prometheus Unbound*, a follow-up to his play *Prometheus Bound* written about 2,500 years ago, has survived; we have no way of knowing how it ends, how Prometheus reconciled with Zeus and how he was freed. Koizumi connects this lost play to our pandemic era and reconstructs it as a ritualistic performance that allows multiple audience members to participate in both virtual and physical spaces. How will the participants, sharing a ceremonial experience on the cusp of life and non life, either distance themselves from or conspire with a real-time “dream unbound”?

How to Participate

In-person participation | Booking essential. Show general admission pass on entry.

- Number of places: 6

Online participation | Please access the event via the link sent upon your reservation.

Language

In-person participation | Japanese

Online participation | Japanese (TBC)

Credit

Concept and Direction | Meiro Koizumi

Performers | Nguyen Hong Quan, Phuong Anh Nguyen, Manh Tuong Tran, Minh Nguyen, Le Thi Le Thuy

VR Production | A440 Inc.

Co-operation | Dinh The Trung, Bui Thi Dong

Production | Theater Commons Tokyo, A440 Inc.

Profile

Meiro Koizumi | Koizumi studied at the International Christian University, Tokyo (1996-1999), Chelsea College of Art and Design, London (1999-2002), and Rijksakademie van beeldend kunsten, Amsterdam (2005-2006). His previous solo exhibitions include “Battlelands” at Pérez Art Museum Miami (2018), “Today my Empire sings” at VACANT, Tokyo (2017), “Trapped Voice Would Dream of Silence” at Arts Maebashi (2015), “Project Series 99: Meiro Koizumi” at Museum of Modern Art, New York (2013). He participated in numerous group shows such as, Sharjah Biennale (2019), Shanghai Biennale (2018), and “BMW Tate Live” at Tate Modern, London (2013).



© Meiro Koizumi



スザンネ・ケネディ&マルクス・ゼルク／ロドリック・ビアステーカー [ドイツ]

Susanne Kennedy & Markus Selg in collaboration with Rodrik Biersteker [Germany]

I AM (VR)

日時
2月17日 [水] - 2月21日 [日]
11:00/12:00/13:00/14:00/15:00/16:00/17:00/18:00/19:00

上演時間
約30分 *入れ替え制

会場
ゲート・インスティテュート 東京ドイツ文化センター
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法
リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示
定員 | 各回8名
リモート参加 | 予約後送付されるURLよりアクセスしてください

上演言語
英語・日本語

VRパフォーマンス
リモート参加有
VR Performance
Online participation

Dates
February 17th [Wed]-21st [Sun]
11:00/12:00/13:00/14:00/15:00/16:00/17:00/18:00/19:00

Performance times
approx. 30 min. *Tickets are valid for one performance only.

Venue
Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to Participate
In-person participation | Booking essential. Show general admission pass on entry.
- Number of places: 8
Online participation | Please access the event via the link sent upon your reservation.

Language
English and Japanese

ポストヒューマン時代を牽引する演出家スザンネ・ケネディの新作、世界初演。仮想空間の旅で出会うものとは？

Susanne Kennedy, a leading director of the post-human era, presents the world premiere of her latest work, “I AM (VR).” What might we encounter on our journey through virtual space?

これまで人間（男性）中心的な視座から構築されてきた西洋演劇の規範や創作技法に対し、まったく異なる独自の美学とアプローチで新風を巻き起こすアーティスト、スザンネ・ケネディ。近年ではフォルクスビューネ劇場とミュンヘン・カンマーシュピーレを拠点に、『ウーマン・イン・トラブル』（2017）、『バージン・スーサイド』（2017）、『三人姉妹』（2019）など、ポストヒューマン的世界観から女性を描く代表作を次々と発表。一方、美術家マルクス・ゼルクとの共作『Coming Society』（2019）、『ULTRAWORLD』（2020）、『ORACLE（神託）』（2020）では、ゲーム的な仮想空間の身体を舞台へと大胆に接続し話題を集めている。

今回ケネディは、シアターコモンズからの委嘱を受けて、VR技術に応用し、仮想空間だけで体験する演劇作品『I AM (VR)』を創作、世界初上演する。観客は、吉凶を仰ぎにデルフォイ神殿を訪れた古代ギリシャ人のように、神託を求めて仮想空間を旅する。そこで出会うものは、人類の歴史か、AIか、アバターに託された自分自身(I AM)か、それとも…？

クレジット
ゲームデザイン | スザンネ・ケネディ、マルクス・ゼルク、ロドリック・ビアステーカー
プログラミング | ロドリック・ビアステーカー
ビジュアルデザイン | マルクス・ゼルク、ロドリック・ビアステーカー
サウンドデザイン・作曲 | リヒャルト・ヤンセン テキスト | スザンネ・ケネディ
オラクル・インタラクション | アンナ・カタリーナ・ラウシュ、グラシエラ・フェルマン、ティル・ロスベルク 翻訳 | 根来美和
共同製作 | シアターコモンズ、フォルクス劇場 ウィーン、オーヴァルオフィス ボーフム、ベルリーナー・フェストシュピーレ、ゲーテ・インスティテュート東京

プロフィール
スザンネ・ケネディ | 1977年ドイツ生まれ。アムステルダム芸術大学(AHK)を卒業し、エルフリーデ・イエリネク等の作品をオランダ各地の劇場で演出。2011年からミュンヘン・カンマーシュピーレで演出活動を開始。2013年『インゴルシュタットの煉獄』で「テアター・ホイテ」の年間最優秀若手演出家に選出される。近年ではベルリン・フォルクスビューネとミュンヘン・カンマーシュピーレを拠点とし、近作には、マルクス・ゼルクとの共作『ULTRAWORLD』、『ORACLE（神託）』（共に2020）など。仮面をつけた俳優たち、録音されたセリフが自動再生される特異な舞台は、ポストヒューマン時代の新たな演劇として注目を集めている。

マルクス・ゼルク | 1974年ドイツ生まれ。デジタルペインティング、彫刻、没入型インスタレーション、演劇、VR等を用い、古来の神話とコンピューターテクノロジー間のダイナミクスを探索するマルチメディア・アーティスト。スザンネ・ケネディとの共作『ULTRAWORLD』（2020）ではファウスト・アワード2020最優秀舞台デザイン賞を受賞。パフォーマンス作品を発表するほか、長編映画、オペラ作品など、多彩なジャンルを横断して活躍している。

ロドリック・ビアステーカー | 1986年オランダ生まれ。HKUユトレヒト芸術大学でバーチャルシアターとゲームのデザインを学ぶ。主に演劇の文脈のなかで映像やインタラクティブなテクノロジーを用い、領域横断的な活動を行うアーティスト。ルール・トリエンナーレ、ミュンヘン・カンマーシュピーレ、ベルリン・フォルクスビューネなどでスザンネ・ケネディと共作。マルクス・ゼルクと共にファウスト・アワード2020最優秀舞台デザイン／映像デザインを受賞した。

Artist Susanne Kennedy’s singular aesthetic and approach introduce a fresh current to the anthropocentric (male-centric) perspectives that ground Western theater norms and creative techniques. In recent years, she has frequently worked with the Volksbühne Berlin and the Munich Kammerspiele, presenting significant works featuring women through a post-humanistic lens such as *Women in Trouble* (2017), *The Virgin Suicides* (2017), and *Three Sisters* (2019). Her co-productions with visual artist Markus Selg, *Coming Society* (2019), *ULTRAWORLD* (2020), and *Oracle* (2020), have garnered much attention for their bold attempts to connect bodies in virtual game-like spaces to the stage.

Commissioned by Theater Commons Tokyo, Kennedy presents the world premiere of *I AM (VR)*, utilizing VR technology to create a theater experience exclusive to the virtual realm. Like the ancient Greeks who visited the Delphi to consult their fortunes, the audience travels through virtual space, searching for an oracle. What might we encounter on this journey? The history of humanity, artificial intelligence, the audience ourselves (“I AM”) as avatars – or something else entirely?

Credit
Game Design | Susanne Kennedy, Markus Selg, Rodrik Biersteker
Programming | Rodrik Biersteker
Visual Design | Markus Selg, Rodrik Biersteker
Sound Design & Composition | Richard Janssen
Text | Susanne Kennedy
Oracle Interaction | Anna-Katharina Rausch, Graciela Fellmann, Till Roßberg, Interpreter | Miwa Negoro
Co-Production | Theater Commons Tokyo, Volkstheater Vienna, Oval Office Bochum, Berliner Festspiele, Goethe-Institute Tokyo

Profile
Susanne Kennedy | Born in Germany in 1977. Susanne Kennedy studied direction at the Hogeschool voor de Kunsten in Amsterdam, debuted on the Dutch stage. In 2011 she was invited to work at the Münchner Kammerspiele. For “Fegfeuer in Ingolstadt,” she was voted Young Director of the Year by Theater heute magazine in 2013. In recent years, she has been based at Volksbühne Berlin and Münchner Kammerspiele, produced “ULTRAWORLD” and “ORACLE” with Markus Selg in 2020. Distorted by masks, playback dialogue, doppelgängers and multimedia, the actors confront the audience with a post-humanistic subjectivity.

Markus Selg | Born in Germany 1974. Markus Selg is a multi-media artist exploring the dynamics between archaic myth and computer technology in forms of digital painting, sculpture, immersive installations, theatre and VR. Selection of exhibitions / performances: “COMING SOCIETY” and “ULTRAWORLD” 2019/2020 at Volksbühne Berlin. For “ULTRAWORLD” he received the Faust Award 2020 for best stage design. He has been active across a variety of genres, including performing art, feature films, and opera productions.

Rodrik Biersteker | Born in the Netherlands in 1986, studied Design for Virtual Theater and Games at the HKU University of Arts in Utrecht. He is an interdisciplinary artist who primarily uses video and interactive technologies in a theatrical context. In recent years, there have been numerous collaborations with Susanne Kennedy in productions for the Ruhrtriennale, Münchner Kammerspiele and Volksbühne Berlin, the latest being “ULTRAWORLD” (2020) for he and Markus Selg were awarded the Faust prize for best stage/video design.



© Franziska Sinn





© Masahiro Hasunuma

高山明/Port B

Akira Takayama/Port B

光のない。—エピローグ？

Kein Licht - Epilog?

日時

3月4日 [木]–3月11日 [木]
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30
休演|3月7日 [日]

上演時間

約120分 (ツアー目安時間)

会場

ニュー新橋ビルおよび新橋駅周辺
〒105-0004 港区新橋2-16-1

参加方法

要予約・コモンズパス提示

*本作品は、お客様がお一人様ずつ出発し、複数の会場を訪問しながら、鑑賞・体験する形式の作品です。
*ご予約の時間帯に来ていただいた順に、お一人様ずつ数分間隔でご出発いただきます。

Dates

March 4th [Thu]-11th [Thu]
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30
Days off|March 7th [Sun]

Performance times

Estimated tour duration: approx. 120 min.

Venue

New Shimbashi Building and around Shimbashi Station
2-16-1 Shimbashi, Minato-ku, Tokyo 105-0004

How to Participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.

- This is an experiential artwork. Audience members will depart one person at a time to visit multiple locations.
- Participants will depart every few minutes at the time of their reservation on a first come, first served basis.

コロナ禍の東京から逆照射する福島との距離、10年という時間。震災から10年を経て、Port Bツアーパフォーマンスがリクリエーション再演で蘇る。

Ten years lie between coronavirus-devastated Tokyo and Fukushima, irradiating in reverse. Port B brings back its tour performance a decade after the earthquake in a recreated revival.

2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く福島原発事故を受けて、ノーベル賞作家エルフリード・イエリネクは2012年3月に戯曲『光のない。』を発表。その半年後、高山明率いるPort Bは、その戯曲を新橋駅周辺でのツアーパフォーマンスとして上演した。

今回、震災から10年、初演から9年という時を経て、このツアーパフォーマンスを大胆に作り替え、再演する。舞台は、東京電力本社をはじめ日本の高度経済成長とともに発展してきたビジネス街・新橋一帯だ。ツアー出発地点のニュー新橋ビルは、福島第一原子力発電所と同じく1971年に開業し、2021年3月に開業50周年を迎える。観客は一人ずつ、世界中に拡散したフクシマの報道写真を手がかりに、新橋と福島が重なる複数の地点を巡り、そこでラジオから流れる声に耳を傾ける。10年前に福島の子供たちによって読み上げられたイエリネクの言葉たちは、コロナ禍で宙吊りの東京に、どのように響くのだろうか。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出| 高山 明
作| エルフリード・イエリネク
翻訳| 林 立騎
声の出演| いわき総合高校演劇部 (2012年当時)
青木 愛、飯島もも、沖崎美菜、片寄真亜也、鎌田彩音、桜井智恵理、鈴木ゆうか、田中 涼、千色和希、新妻宏恵、西田 藍、原田麻穂、松本芽生、屋代七海、渡辺真衣、渡部若菜
写真監修 (初演版)| 土屋紳一
デザイン| 阿部航太
演出助手・制作| 田中沙季
制作アシスタント| 中島百合絵
協力| ニュー新橋ビル商店連合会、ニュー新橋ビル管理組合、港区、石井路子、いわき総合高校
2012年初演版製作| フェスティバル/トーキョー、Port B

プロフィール

高山明 (たかやま・あきら) | 2002年に創作ユニットPort B (ポルト・ビー) を結成。国内外の諸都市において、ツアーパフォーマンス、映像インスタレーション、社会実験的プロジェクト、言論イベント、観光ツアーなど、多岐にわたる作品やプロジェクトを展開している。いずれの活動においても「演劇とは何か」という問いが根底にあり、演劇の可能性を拡張し、社会に接続する方法を追求。観客論を軸に、観客自身が創造的に現実の都市や社会のなかで不可視なものとの出会い、思考する装置としての演劇を提案。2013年にはPort都市リサーチセンターを設立し、演劇的発想を観光や都市プランニング、社会実践やメディア開発などにも応用する取り組みを行っている。

Following the March 11, 2011 Tohoku earthquake and subsequent nuclear disaster in Fukushima, Nobel Prize laureate Elfriede Jelinek presented *Kein Licht*. in March 2012. Six months later, Akira Takayama-led Port B performed the play as a tour performance around Shimbashi Station. Now, exactly ten years after the earthquake and nine years after its premiere, this tour performance will be revived in a bold restaging. The setting is the Shimbashi area, a business district that developed alongside TEPCO and other markers of Japan’s rapid economic growth. The New Shimbashi Building, which serves as the tour’s starting point, opened in 1971, the same year as the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. It will celebrate its 50th anniversary in March 2021. Aided by globally-dispersed news photos from the Fukushima disaster, each audience member will individually visit places where Shimbashi and Fukushima intersect and listen to voices on the radio. How will Jelinek’s words, read aloud by high school girls from Fukushima a decade ago, resonate with a Tokyo thrown into limbo by the coronavirus crisis?

Language

Japanese

Credit

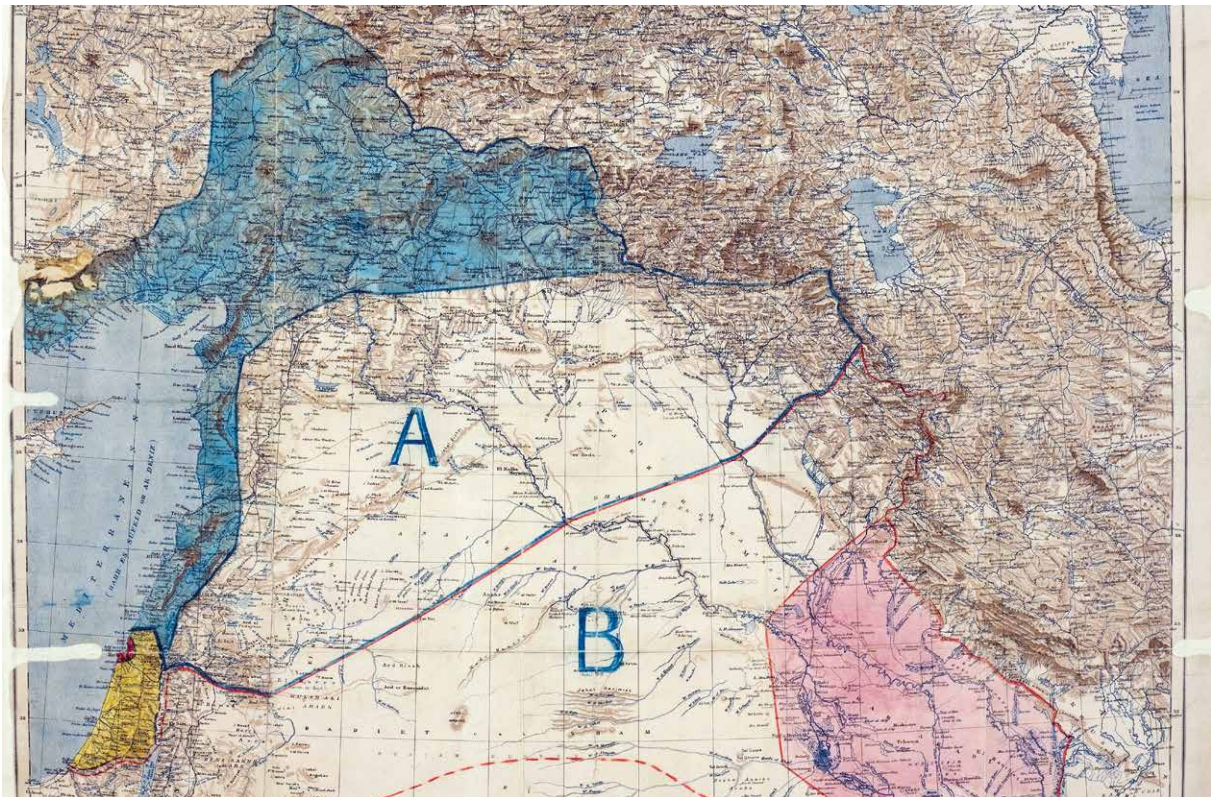
Concept and Direction| Akira Takayama
Text| Elfriede Jelinek
Translation| Tatsuki Hayashi
Voice Cast| Iwaki Sogo High School Theatre Club (2012)
Mana Aoki, Momo Iijima, Mina Okizaki, Maya Katayose, Ayane Kamata, Chieri Sakurai, Yuka Suzuki, Ryo Tanaka, Kazuki Chiro, Hiroe Nitsuma, Ai Nishida, Maho Harada, Mei Matsumoto, Nanami Yashiro, Mai Watanabe, Wakana Watabe
Photography Supervision (Premiere, 2012)| Shinichi Tsuchiya
Design| Kota Abe
Assistant Direction, Production Management| Saki Tanaka
Production Assistant| Yurie Nakajima
Co-operation| New Shimbashi Building Shops Association, New Shimbashi Building Management Association, Minato City, Michiko Ishii, Iwaki Sogo High School (Fukushima)
Production (Premiere, 2012)| Festival/Tokyo, Port B

Profile

Akira Takayama | Akira Takayama formed the creative collective Port B in 2002. He produces a wide range of artworks and projects that include tour-style performances, video installations, social experiments, discussions, and sightseeing tours. In 2013, he founded Port Urban Research Center, which applies theatrical methods to tourism, urban planning, social practices, and media development, among other activities.



© Yuji Oku



バディ・ダルル [フランス] Bady Dalloul [France]

架空国家の作り方 How to Make Imaginary Countries

日時

3月4日 [木] 15:00-18:00

3月5日 [金] 15:00-18:00

上演時間

約180分

会場

リーブラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズパス提示

定員 | 各回15名 (応募者多数の場合は抽選)

募集期間 | 2021年1月22日 [金] - 2月21日 [日]

(結果は2月25日 [木] までにメールにて通知)

Dates

March 4th [Thu] / 15:00-18:00

March 5th [Fri] / 15:00-18:00

Performance times

approx. 180 min.

Venue

Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to Participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.

- Each workshop is limited to 15 persons. In case of high demand, entry will be allocated by lottery.

- Application deadline: February 21st / 23:59. Applicants will be informed of the result by February 25th.

ワークショップ

Workshop

複数の声が響き合い、物語／歴史が絡み合う。 中東・アラブ世界から東京を眼差し直すワークショップ。

Re-examining Tokyo from the Middle East and the Arab world, Bady Dalloul hosts a workshop where multiple voices resonate together and (hi)stories intertwine.

シリア人の両親を持ち、フランスに生まれ育ったアーティスト、バディ・ダルル。政治、社会学、そして歴史への広がりを持つ彼の作品は、架空と現実を見つめながら、その対話を促し、歴史記述の方法について問いかけるものだ。映像、テキスト、パフォーマンスなどを複合的に紡ぎ合わせた作品は、パリのカディスト財団、パレ・ド・トーキョー、アラブ世界研究所などで展示・コレクションされ、若手の現代美術作家として注目を集めている。

ダルルは、2015年に日本に長期滞在し、広島、パレスチナ、シリアなど世界のカタストロフに見舞われた地域と個人史をつなぐ長編映像作品を制作した。そして2021年1月、再び日本を訪れ、ヴィラ九条山で4ヶ月におよぶリサーチ滞在に着手する。今回のシアターコモンズでは、リサーチと対話をベースとした2日間の集中ワークショップを開催。ダルル自身によるレクチャーパフォーマンス、複数のゲストリサーチャーによるプレゼンテーション、港区内のフィールドワークといった様々な要素から構成する。参加者は、大文字の歴史と個人の物語を行き来しながら、中東・アラブ世界から東京を眼差し直すことになるだろう。

*ヴィラ九条山は、フランス外務・国際開発省管轄の文化機関です。アンスティチュ・フランス日本の支部のひとつとして活動し、主要メセナのベタンクールシュエラー財団とアンスティチュ・フランスの支援を受けています。

上演言語

英語 (日本語通訳つき)

クレジット

構成・演出 | バディ・ダルル
助成 | 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランス日本、ヴィラ九条山
アシスタント | ジョイス・ラム
通訳 | 田村かのこ
会場協力 | 港区

プロフィール

バディ・ダルル | 1986年生まれ。シリア人の両親のもとパリに生まれる。2015年、パリ国立高等美術学校を審査員特別メンションとともに卒業。政治、社会、歴史を織り込んだテキスト、ドローイング、ビデオ、オブジェから構成される彼の作品は、想像と現実を拮抗させ、結びつける。思春期からのオブセッションである「架空の国家の創造」というモチーフは、現在の創作の核心でもある。これまで ヴァル・ド・マルヌ現代美術館、アラブ世界研究所、グルベンキアン美術館などで作品を展示。17年にはパレ・ド・トーキョーのPrix découverte des Amis賞にノミネートされ、18年にはアラブ世界研究所のPrix d'Ami賞を受賞。彼の作品は、ボンビドー・センター、ヴァル・ド・マルヌ現代美術館、カディスト財団、FRACイル・ド・フランス、アラブ世界研究所にコレクションされている。バディ・ダルルは2021年度ヴィラ九条山のレジデントアーティストであり、滞在中に「想像上の私の祖国」と名付けられた新たなプロジェクトに取り組む。

Artist Bady Dalloul was born to a Syrian family and grew up in France. His interests span politics, sociology, and history. Composed as collages of film, text, and performance, Dalloul's works observe fiction and reality and encourage dialogue between the two to question methods of writing history. His art has been exhibited or acquired by institutions including Paris's Kadist Foundation, Palais de Tokyo, and the Arab World Institute, gaining him traction as an emerging contemporary artist.

In 2015, Dalloul traveled to Japan for a long-term stay and produced a feature-length film connecting personal histories with various regions affected by global catastrophe, including Hiroshima, Palestine, and Syria. In January 2021, he visits the country again for a four-month research residency at Villa Kujoyama. For TCT'21, he will host a two-day intensive workshop based on research and dialogue. The program will include many elements, spanning a lecture-performance by Dalloul, guest researchers' presentations, and fieldwork in Minato ward. Participants will travel through personal and grand historical narratives and re-examine Tokyo from the Middle East and the Arab world.

*Villa Kujoyama is an institution administered by the cultural cooperation network of the Ministry for Europe and Foreign Affairs. Operated by the Institut français du Japon, Villa Kujoyama is supported by its main patron, the Bettencourt Schueller Foundation, and by the Institut français.

Language

English (with Japanese interpretation)

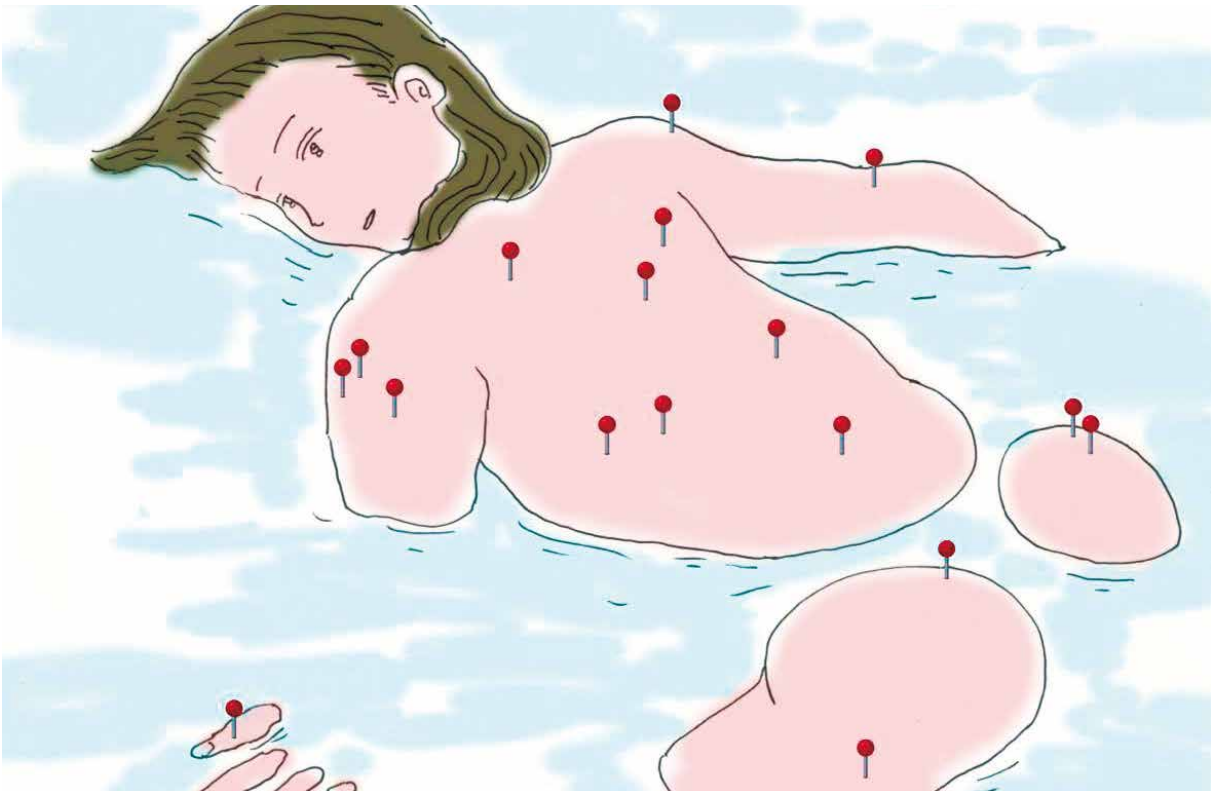
Credit

Concept and Direction | Bady Dalloul
Supported by Embassy of France in Japan / Institut français du Japon, and Villa Kujoyama
Assistant | Joyce Lam
Interpreter | Kanoko Tamura
Venue Support | Minato City

Profile

Bady Dalloul | Bady Dalloul was born to Syrian Parents in Paris in 1986. He graduated from the École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris in 2015 with honours from the jury. His work, in texts, drawings, video, and objects imbued with a political, sociological and historical dimension, confronts and brings together the imaginary and the real. The creation of fictitious countries, the artist's obsession since his adolescence, is at the heart of his current work. His work has been exhibited at the MAC/VAL (2017), the Arab World Institute, the Gulbenkian Foundation (2018), the Palais de Tokyo (2020) and IVAM of Valencia (2020). In 2017, he was nominated for the Prix découverte des Amis du Palais de Tokyo, and in 2018 he was awarded the Prix des Amis de l'IMA. His work is part of the collections of the Centre Pompidou, the Arab Museum of Modern Art (Mathaf) Qatar, MAC/VAL, the Kadist Foundation, the Frac Île-de-France and the Institut du Monde Arabe. Bady Dalloul is laureate of Villa Kujoyama in 2021. During his residency stay, he is elaborating his new project "My Imaginary Country."





百瀬文 Aya Momose

鍼を打つ Performing Acupuncture

日時

3月6日 [土]
11:00/13:00/15:00★/17:00★/19:00
3月7日 [日]
11:00★/13:00★/15:00/17:00/19:00
3月8日 [月]
13:00★/15:00★/17:00/19:00
3月9日 [火]
13:00/15:00★/17:00★/19:00
3月10日 [水]
13:00/15:00/17:00★/19:00★

★は女性限定参加（ご自身の性自認が女性の方のみ参加可能）の回です。

上演時間

約60分

会場

SHIBAURA HOUSE 5F
〒108-0023 港区芝浦3-15-4

セラピーパフォーマンス

Therapy Performance

Dates

March 6th [Sat]
11:00/13:00/15:00★/17:00★/19:00
March 7th [Sun]
11:00★/13:00★/15:00/17:00/19:00
March 8th [Mon]
13:00★/15:00★/17:00/19:00
March 9th [Tue]
13:00/15:00★/17:00★/19:00
March 10th [Wed]
13:00/15:00/17:00★/19:00★

★ is a women-only session (only those identify as female can participate)

Performance times

approx. 60 min.

Venue

5F SHIBAURA HOUSE
3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

鍼という異物が侵入する時、身体は何を欲望／想像するのか？
自らの身体という未知の劇場を体感する、触覚セラピーパフォーマンス。
What does the body desire or imagine when invaded by the foreign object of acupuncture needles?
Aya Momose delivers a tactile therapy performance in which our own bodies provide a stage for the unknown.

身体と演じること、眼差しと欲望、セクシュアリティとジェンダーについて、映像やパフォーマンスなど多様な方法でアプローチを重ねてきたアーティスト、百瀬文。そこに通底するのは、人間や生命同士が触れ合い、欲望し合い、すれ違う時に生じる緊張と葛藤、その背後に存在する不可視の抑圧や社会規範への強い問題意識だ。

今回百瀬は、鍼治療を取り入れたパフォーマンス作品をあらたに創作する。東洋医学に基づく鍼治療では、微細な異物としての鍼を身体に侵入させることで刺激し、全身に効果を循環させていく。百瀬は、このプロセスに触覚的かつ聴覚的な仕掛けを加え、観客の身体そのもののの中に、未開の感覚とイメージを立ち上げていく。

接触がタブーとなったコロナ禍において、あえて鍼という異物を介して接触を試みる一連のセラピー／パフォーマンスは、意識と無意識、痛みと快楽、治療と官能など、超えられない一線を超えていくスリリングな体験を私たちにもたらすはずだ。

参加方法

要予約・コモンズバス提示

*別途、施術代として受付時に3,000円を頂戴いたします
定員 各回6名

注意事項

- ・本公演では、腕・ひざ下・腹部（胸より下）等に施術を行います。施術時は必要に応じて該当箇所を露出いたします。参加者同士のベッドは十分に間隔をあけて配置いたします。
- ・安心してご参加いただけるよう、女性限定参加の回も設定しております。
- ・鍼灸師の性別は選べません。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出 | 百瀬 文
鍼師 | 石上絵里奈、中島瑞穂、長谷川洋介、比嘉優貴、松波太郎、和田彩芽
製作 | シアターコモンズ

プロフィール

百瀬 文（もせ・あや） | 1988年東京都生まれ。アーティスト。パフォーマンスを記録するための方法としてビデオを用いはじめ、撮影者と被写体のあいだの不均衡性を映像内で再考させる試みを行う。近年の主な個展に「サンプルボイス」（横浜美術館アートギャラリー1、2014年）、主なグループ展に「戦争画STUDIES」（東京都美術館ギャラリーB、2015年）、「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」（国立新美術館、韓国国立現代美術館、2015-16年）、「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」（森美術館、2016年）などがある。2020年には自身の個展「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」や遠藤麻衣との共作展「新水晶宮」を開催、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。

Artist Aya Momose uses various methods, including film and performance, to approach ideas around gaze and desire, sexuality and gender, body and performance. Underlying her work is an acute awareness of the societal norms and invisible structures of oppression that lurk behind tension and turmoil when people or beings touch, desire, or fail to understand each other.

For TCT'21, Momose creates a new performance piece that incorporates acupuncture treatment. Based on traditional Chinese medicine, acupuncture involves inserting thin foreign objects (needles) into the body, stimulating it and circulating their effects throughout. Momose adds tactile and aural mechanisms to this process to produce new sensations and images inside the audience's bodies.

With the pandemic rendering touch a taboo, her therapy/performance series dares to make contact via the foreign object of acupuncture needles. Traversing the uncrossable lines between the conscious and unconscious, pain and pleasure, treatment and carnality, they promise to bring us a thrilling experience.

How to Participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.
* An additional treatment fee of 3,000 yen will be charged upon registration.
- Number of places: 6

Note

- In this performance, you will be asked to expose your arms, knees, and abdomen (below the chest), and lie down on a bed to receive acupuncture treatment. The beds will have a sufficient space between them.
- To ensure easier participation, we will hold women-only sessions.
- The gender of the acupuncturist cannot be selected.

Language

Japanese

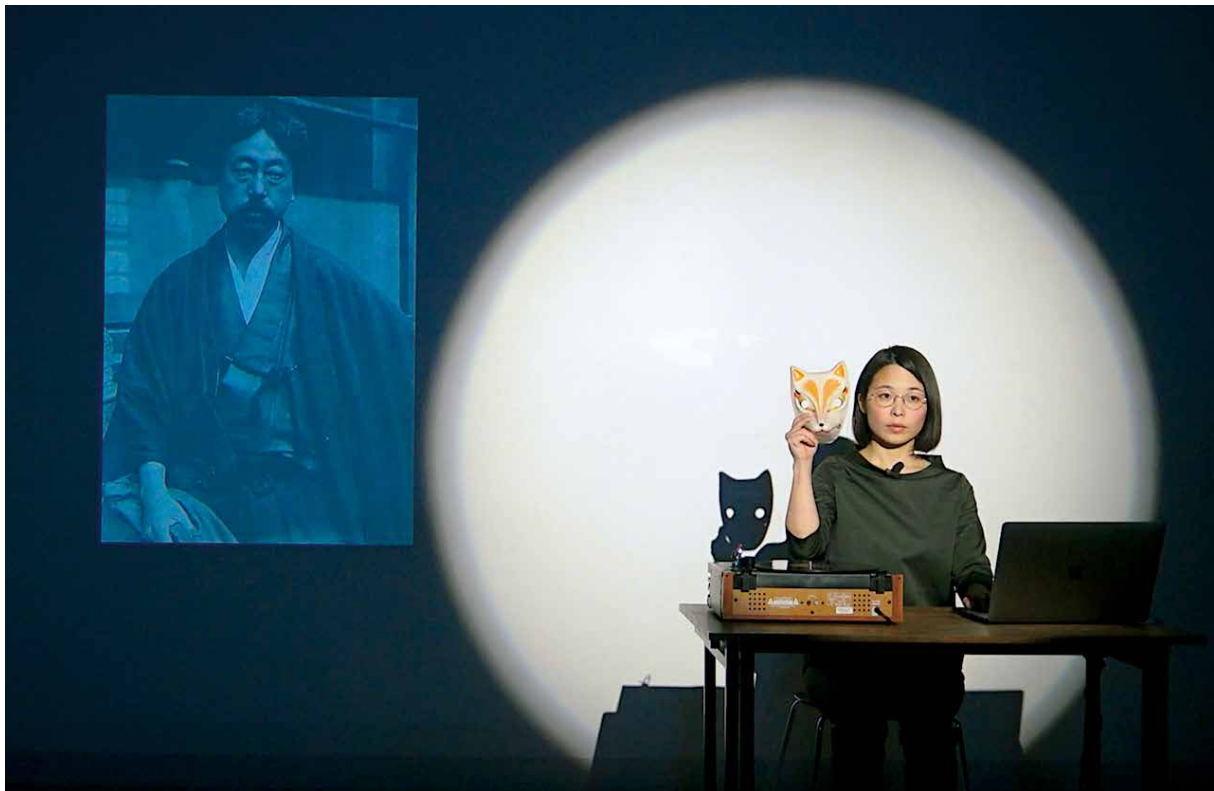
Credit

Concept and Direction | Aya Momose
Acupuncturist | Erina Ishigami, Mizuho Nakajima, Yosuke Hasegawa, Yuki Higa, Taro Matsunami, Ayame Wada
Production | Theater Commons Tokyo

Profile

Aya Momose | Born in Tokyo, 1998. Artist. Using video as a method to record the performance, Momose attempts to rethink the imbalance between camera operator and subject in her work. In recent years she has held solo exhibition "Voice Samples" (Art Gallery 1, Yokohama Museum of Art, 2014) and has participated in following group exhibitions: "Sensou-Ga Studies" (Tokyo Metropolitan Art Museum B-Gallery, 2015), "Artist File 2015 Next Doors: Contemporary Art in Japan and Korea" (The National Art Center, 2015-16), "Roppongi Crossing 2016: My Body, Your Voice" (Mori Art Museum, 2016). In 2020 Momose held a solo exhibition "I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U" and co-produced "New Crystal Palace" exhibition with artist Mai Endo. She is also expanding her inquiry into the field of gender and sexuality.





佐藤 朋子

Tomoko Sato

オバケ東京のためのインデックス 序章

Index for a Ghost Tokyo: Introduction

Lecture Performance

リモート参加有

Lecture Performance

Online participation

日時

3月9日 [火] 18:00

3月10日 [水] 18:00

Dates

March 9th [Tue] / 18:00

March 10th [Wed] / 18:00

上演時間

約70分

Performance times

approx. 70 min.

会場

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

Venue

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示

リモート参加 | 予約後送付されるURLよりアクセスしてください

How to Participate

In-person participation | Booking essential. Show general admission pass on entry.

Online participation | Please access the event via the link sent upon your reservation.

複数年にわたって都市をトレースするリサーチ、始動。
都心で移ろいゆくものたちが交差する、レクチャーパフォーマンス。

The city center's vicissitudes intersect in Tomoko Sato's lecture performance, representing the beginnings of years-long research to trace the city.

土地や歴史の膨大なリサーチを新たなナラティブに再編成し、レクチャーパフォーマンスとして語り直す手法を開拓しているアーティスト、佐藤朋子。複数の物語／歴史の合流地点としてのレクチャーは、彼女の声と身体を経由し、そこにあり得たかもしれないもうひとつのフィクションを生み出す装置ともなる。

今回佐藤は、シアターコモンズからの委嘱を受け、港区エリアをフィールドとするリサーチを展開する。日本の近現代史の表舞台であり続け、現在も再開発により風景が激変する都心・港区。その過剰さと向き合うべく佐藤は、1957年に岡本太郎が記した都市論「オバケ東京」を出発点として、今後複数年かけてリサーチの成果を自らの身体にトレースする。その結果として紡がれるレクチャーパフォーマンスは、この地域で移ろいゆくものたちをいかに招き入れ、どんな物語を語り直すことになるだろうか。

Tomoko Sato is an artist reorganizing vast amounts of research on land and history into new narratives, and pioneering techniques of reimagining their telling in lecture performances. Confluences of multiple (hi)stories, her lectures act as the materialization of potential alternative fictions via the artist's voice and body.

For *Index for a Ghost Tokyo: Introduction*, Sato was commissioned by Theater Commons Tokyo to develop her research on the Minato ward area. Tokyo's city center, Minato ward remains at the front stage of Japan's modern history, with redevelopments drastically changing its landscape even today. To confront this excess, Sato will use Taro Okamoto's 1957 urban treatise *Ghost Tokyo* as a starting point, tracing her research outcomes over the next several years on her own body. How will the resulting lecture performance invite in the vicissitudes of this region, and what kind of story will be told anew?

上演言語

日本語

Language

Japanese

クレジット

構成・演出・出演 | 佐藤朋子

会場協力 | 港区

製作 | シアターコモンズ

Credit

Concept and Direction | Tomoko Sato

Venue Support | Minato City

Production | Theater Commons Tokyo

プロフィール

佐藤 朋子 (さとう・ともこ) | 1990年長野県生まれ、神奈川県在住。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の実践を行っている。日本が迎えたいびつな近代化への道のりや、大文字の歴史からこぼれ落ちてしまった出来事が物語る歴史の複数性への関心と、各地に残る伝説や遺跡などへの興味から、作品を制作する。そして、史実の調査過程から浮かび上がる事柄を複眼的につなぎ合わせ、フィクションとドキュメントを行き来する物語を構築する。主な作品に、『しろぎつね、隠された歌』(2018)、『瓦礫と塔』『ふたりの円谷』(Port B 東京修学旅行プロジェクトにて上演、2018-19)、『103系統のケンタウロス』(2018)、『MINE EXPOSURES』(2019) など。

Profile

Tomoko Sato | Born in Nagano in 1990. Lives and works in Kanagawa, Japan. Received her M.F.A. in Film and New Media from Graduate School of Tokyo University of the Arts. Sato expresses with "narrative," mainly in her lecture-performance which is her main activity. Her recent works include "The Reversed Song, A Lecture on 'Shiro-Kitsune (The White Fox)'" (2018), "Centaurus on Route 103" (as solo exhibition in Gallery Saitou Fine arts, Kanagawa, 2018), "Museum" (as solo exhibition "MINE EXPOSURE" in BITONG POINT, Akita, 2019), "The Debris and Tower" and "The Double Tsuburaya" (as part of "New Tokyo Excursion Project" by Port B, 2018-2019).





©HTC VIVE ORIGINALS, photo by Chang Jhong-Yuan

コモンズ・トーク#1

Commons Talk #1

ツァイ・ミンリャンを迎えて

Presenting Tsai Ming-Liang

日時

2月16日 [火] 19:00-20:30

Date

February 16th [Tue] / 19:00-20:30

上演時間

90分

Performance times

90min.

会場

オンライン

Venue

Online

参加方法

予約後送付されるURLよりアクセスしてください

How to Participate

Please access the event via the link sent upon your reservation.

台湾の巨匠映画監督、ツァイ・ミンリャンを招いてのオンライン・トーク。VR映画『蘭若寺の住人』を制作した経緯、VRを活用した映像表現の可能性、パンデミック後の世界などについて詳しく聞いていく。聞き手は長年ツァイ・ミンリャン監督の映画を見続け、レビューも執筆してきた映画監督、中村佑子。また、VRをアート創作に取り入れる意義や展望についても議論する。

An online conversation with Taiwanese auteur Tsai Ming-Liang, Commons Talk #1 will include detailed questions about the production process of VR film *The Deserted*; the artistic potential of virtual reality in video works; the post-pandemic world; and more. Yuko Nakamura, a film director and long-time viewer and reviewer of Tsai Ming-Liang's work, will serve as interlocutor. We will also discuss the significance and prospects of incorporating virtual reality technologies into artistic creation.

上演言語

中国語 (日本語通訳つき)

Language

Chinese (with Japanese interpretation)

クレジット

通訳 | 樋口裕子

Credit

Interpreter | Yuko Higuchi

登壇者 / Panelist

ツァイ・ミンリャン | 映画監督

Tsai Ming-Liang | Film Director



©HTC VIVE ORIGINALS, photo by Chang Jhong-Yuan

司会 / Moderator

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ ディレクター

Chiaki Soma | Director of Theater Commons Tokyo



Photo: Yurika Kawano

聞き手 / Interlocutor

中村佑子 | 映画監督・作家

Yuko Nakamura | Film Director, Writer





© Franziska Sinn

コモンズ・トーク#2

Commons Talk #2

スザンネ・ケネディらを迎えて

Presenting Susanne Kennedy, Markus Selg and Rodrik Biersteker

<div>日時</div> <div>2月20日 [土] 19:00-20:30</div>	<div>Date</div> <div>February 20th [Sat] / 19:00-20:30</div>
<div>上演時間</div> <div>90分</div>	<div>Performance times</div> <div>90 min.</div>
<div>会場</div> <div>オンライン</div>	<div>Venue</div> <div>Online</div>
<div>参加方法</div> <div>予約後送付されるURLよりアクセスしてください</div>	<div>How to Participate</div> <div>Please access the event via the link sent upon your reservation.</div>

- トーク
- リモート参加のみ
- Talk
- Online-only event

ポストヒューマン時代を牽引する演出家スザンネ・ケネディと、その世界観を視覚的に体現する美術家マルクス・ゼルク、コラボレーターのロドリック・ビアステーカーを招いてのオンライン・トーク。今回シアターコモンズからの委嘱を受けて世界初演する「I AM (VR)」のコンセプトや方法論はもちろん、演劇と仮想性をめぐり、コロナ後の哲学的視点からも議論する。

For Commons Talk #2, we present an online discussion with Susanne Kennedy, a leading director of the post-human era, and artist Markus Selg, who gives visual shape to the corresponding worldviews and Rodrik Biersteker as the collaborator. We will discuss the concept and methodologies of *I AM (VR)* (commissioned by Theater Commons Tokyo and making its world premiere at our fifth edition), along with a rumination on theater and virtuality, as well as a philosophical take on the aftermath of the coronavirus pandemic.

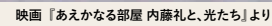
<div>上演言語</div> <div>英語 (日本語通訳つき)</div>	<div>Language</div> <div>English (with Japanese interpretation)</div>
<div>クレジット</div> <div>通訳 田村かのこ</div>	<div>Credit</div> <div>Interpreter Kanoko Tamura</div>
<div>登壇者 / Panelists</div> <div>スザンネ・ケネディ 演出家</div> <div>—</div> <div>Susanne Kennedy Director</div>	<div>司会 / Moderator</div> <div>相馬千秋 (そうま・ちあき) シアターコモンズ ディレクター</div> <div>—</div> <div>Chiaki Soma Director of Theater Commons Tokyo</div>
<div>マルクス・ゼルク マルチメディア・アーティスト</div> <div>—</div> <div>Markus Selg Multi-media artist</div>	<div>ロドリック・ビアステーカー アーティスト</div> <div>—</div> <div>Rodrik Biersteker Artist</div>



© Franziska Sinn



Photo: Yurika Kawano



Online-only event

Please access the event via the link sent upon your reservation.

Photo: Yurika Kawano



フォーラム

リモート参加のみ

Forum

Online-only event

Healing and Rebirth: The Future of Our ‘Commons,’ As Conceived Between Two Crises

3月11日 [木] 19:00-21:00

March 11th [Thu] / 19:00-21:00

120分

120 min.

オンライン

Online

予約後送付されるURLよりアクセスしてください

Please access the event via the link sent upon your reservation.

Ten years since the earthquake; one year since the onset of the current pandemic. The invisible and uncontrollable wonders of radioactivity and virulence have placed huge question marks over our anthropocentric values and our faith in technology. On the other hand, every time humans have experienced a natural disaster or pandemic, art, religion, and other cultural institutions have allowed us to heal our individual and collective traumas and restored us to order and normality.

How might we be able, in a time suspended between two crises, to reestablish a new ecology, to strive for a form of harmony that would include the non-human? And how, too, might we remodel the “commons” of our society? Recovery and rebirth; art and religion; history and hereafter. A decade after 3/11, we turn this enormous question toward the future.

日本語

Japanese

志賀理江子（しが・りえこ）| 1980年、愛知県生まれ。2004年にロンドンのChelsea College of Art and Design卒業。08年より宮城県在住。11年東日本大震災で被災しながらも制作を続け、12年に「螺旋海岸」展（せんだいメディアテーク）を開催。そのほかの展覧会に、15年「In the Wake」展（山形県立美術館）、「New Photography 2015」展（ニューヨーク近代美術館）、17年「ブラインド・デート」展（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）など多数。



—

Meiro Koizumi | Artist



© Meiro Koizumi

Lieko Shiga | Born 1980 in Aichi Prefecture. Graduated from Chelsea College of Art and Design in London in 2004. Living in Miyagi Prefecture since 2008. Despite being affected by the Great East Japan Earthquake in 2011 she continued her work and held a solo exhibition "Rasen Kaigan" (Sendai Mediatheque) in 2012. Her recent exhibitions include: "In the Wake" (Museum of Fine Arts, Boston), "New Photography 2015" (The Museum of Modern Art, New York) in 2015, "Blind Date" (Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art) in 2017, and more.

—

Akira Takayama | Artist



© Yuji Oku

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ ディレクター

Chiaki Soma | Director of Theater Commons Tokyo



Photo: Yurika Kawano

会場

VENUES

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線／
都営大江戸線「青山一丁目駅」4（北）出口より徒歩7分

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itcho Station (Tokyo Metro Ginza or
Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 7 minutes walk
from 4 (North) Exit

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩5分
都営三田線・浅草線「三田駅」A6出口より徒歩6分

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023
Tamachi Station (JR): 5 minutes walk from
East (Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
6 minutes walk from A6 Exit

SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4
Tel: 03-5419-6446
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩7分
都営三田線・浅草線「三田駅」A4出口より徒歩10分

SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446
Tamachi Station (JR): 7 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
10 minutes walk from A4 Exit

ANB Tokyo

〒106-0032 港区六本木5-2-4
東京メトロ日比谷線／
都営大江戸線「六本木駅」出口3より徒歩3分

ANB Tokyo

5-2-4 Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032
Roppongi Station (Tokyo Metro or Toei Oedo Line):
3 minutes walk from 3 Exit

ニュー新橋ビル

〒105-0004 東京都港区新橋2-16-1
JR／東京メトロ銀座線／都営地下鉄浅草線／
新交通ゆりかもめ「新橋駅」
日比谷口・烏森口より徒歩1分

New Shimbashi Building

2-16-1 Shimbashi, Minato-ku, Tokyo 105-0004
Shimbashi Station (JR / Tokyo Metro Ginza Line /
Toei Asakusa Line / Yurikamome Line): 1 minute
walk from Hibiya or Karasumori Exit

スケジュール／SCHEDULE

*リアル参加日時のみを記載

2021

2 FEB

アーティスト／演目	11 THU	12 FRI	13 SAT	14 SUN	16 TUE	17 WED	18 THU	19 FRI	20 SAT	21 SUN	23 TUE	24 WED	25 THU	26 FRI	27 SAT	28 SUN
ツァイ・ミンリャン 「蘭若寺の住人」 Tsai Ming-Liang “The Deserted”	11:00/13:00/15:00/17:00/19:00				11:00/13:00/15:00/17:00/19:00											
中村佑子 「サスペンデッド」 Yuko Nakamura “Suspended”	11:00/11:30/ 12:00/12:30/ 13:00/13:30/ 14:00/14:30/ 15:00/15:30/ 16:00/16:30/ 17:00	15:00/15:30/ 16:00/16:30/ 17:00/17:30/ 18:00/18:30/ 19:00	11:00/11:30/12:00/12:30/ 13:00/13:30/14:00/14:30/ 15:00/15:30/16:00/16:30/ 17:00	15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/ 19:00				11:00/11:30/12:00/12:30/ 13:00/13:30/14:00/14:30/ 15:00/15:30/16:00/16:30/ 17:00				11:00/11:30/ 12:00/12:30/ 13:00/13:30/ 14:00/14:30/ 15:00/15:30/ 16:00/16:30/ 17:00	15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/ 18:00/18:30/19:00	11:00/11:30/12:00/12:30/ 13:00/13:30/14:00/14:30/ 15:00/15:30/16:00/16:30/ 17:00		
小泉明郎 「解放されたプロメテウス」 Meiro Koizumi “Prometheus Unbound”					15:00/15:30/ 16:00/16:30/ 17:00/17:30/ 18:00/18:30/ 19:00/19:30											
スザンネ・ケネディ&マルクス・ゼルク／ ロドリック・ピアステカー 「I AM (VR)」 Susanne Kennedy & Markus Selg in collaboration with Rodrik Biersteker “I AM (VR)”					11:00/12:00/13:00/14:00/15:00/16:00/17:00/18:00/19:00											
高山明/Port B 「光のない。—エピローグ?」 Akira Takayama/Port B “Kein Licht - Epilog?”																
バディ・ダルル 「架空国家の作り方」 Bady Dalloul “How to Make Imaginary Countries”																
百瀬文 「鍼を打つ」 Aya Momose “Performing Acupuncture”																
佐藤朋子 「オバケ東京のためのインデックス 序章」 Tomoko Sato “Index for a Ghost Tokyo: Introduction”																
コモンズ・トーク #1 「ツァイ・ミンリャンを迎えて」 Commons Talk #1 “Presenting Tsai Ming-Liang”					19:00-20:30											
コモンズ・トーク #2 「スザンネ・ケネディらを迎えて」 Commons Talk #2 “Presenting Susanne Kennedy, Markus Selg and Rodrik Biersteker”									19:00-20:30							
コモンズ・フォーラム #1 「病の時代における『孵化／潜伏するからだ』をめぐって」 Commons Forum #1 “On ‘Bodies in Incubation’ in an Age of Illness”																
コモンズ・フォーラム #2 「治癒と再生—2つの災厄の間から構想する『コモンズ』の未来」 Commons Forum #2 “Healing and Rebirth: The Future of Our ‘Commons,’ As Conceived Between Two Crises”																

038

SCHEDULE

コモンズ・トーク

Commons Talk

 コモンズ・フォーラム
Commons Forum

3 MAR

[illegible]

SCHEDULE

039

クレジット

シアターコモンズ ’21

シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)
副委員長 | 王淑芳 (台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長)
委員 | ベーター・アンダース (ゲーテ・インスティトゥート東京)
委員 | サンゾン・シルヴァン (在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本)
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館)
委員 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)
監事 | 須田洋平 (弁護士)

シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)
制作統括 | 清水聡美、藤井さゆり (芸術公社)
制作 | 山里真紀子、芝田 遥
票券・進行 | 戸田史子 (芸術公社)
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣、鈴木理映子 (芸術公社)
広報 | 岩本室佳
広報アドヴァイザー | 若林直子
企画アドヴァイザー | 岩城京子、大館奈津子 (芸術公社)
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野 響 (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)
インターン | 小橋清花、関あゆみ、鄭 禹晨、二河茉莉香、ブルサコワありな
経理 | 松下琴美
法務アドヴァイザー | 須田洋平 (弁護士／芸術公社)
協力 | 有限会社ネオローグ

シアターコモンズ'21 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル
照明 | 山下恵美 (RYU Inc.)
音響 | 稲荷森 健
映像 | 佐藤佑樹 (エディスグローヴ)
記録映像・写真 | 佐藤 駿

「アート・テレポーテーション・プラットフォーム事業」パートナー | 株式会社440

シアターコモンズ ’21

発行日 | 2021年2月8日
執筆 | シアターコモンズ実行委員会
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野 響 (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策、和田真季 (LABORATORIES)
発行 | シアターコモンズ実行委員会
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

CREDIT

Theater Commons Tokyo ’21

Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman | WANG Shu-Fang (Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan)
Member | Peter Anders (Director, Goethe-Institut Tokyo)
Samson Sylvain (Embassy of France in Japan / Attaché culturel, Institut français du Japon)
Bas Valckx (Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator | Satomi Shimizu, Sayuri Fujii (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator | Makiko Yamazato, Haruka Shibata
Ticket・Coordinator | Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo)
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba, Rieko Suzuki (Arts Commons Tokyo)
PR | Sayaka Iwamoto
PR Advisor | Naoko Wakabayashi
Project Advisor | Kyoko Iwaki, Natsuko Odate (Arts Commons Tokyo)
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Intern | Kiyoka Kobashi, Ayumi Seki, Ushin Tei, Marika Niko, Alena Prusakova
Accountant | Kotomi Matsushita
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)
Cooperation | neo-logue inc.

Theater Commons Tokyo ’21 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill
Lighting | Megumi Yamashita (RYU Inc.)
Sound | Takeshi Inarimori
Movie | Yuki Sato (Edith Grove)
Documentation Video and Photography | Shun Sato

Partner for “Art Teleportation Platform Project” | A440 Inc.

Theater Commons Tokyo ’21

Date of Issue | February 8th, 2021
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato, Maki Wada (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

卵
孵
化
／
潜
伏

す
る
力
ら
だ